

式辞（平成22年度）

平成22年度入学式にあたり、お祝いと歓迎の言葉を申し述べます。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。幾多のご努力とご苦労を経て、ついに皆さんは大学生、あるいは大学院生となられたわけで、その喜びはいかばかりかとご推察申し上げます。また、ご列席いただいているご父母をはじめとするご家族の方々にもお祝いを申し上げます。

本学にとって入学式は毎年のごとくは、新入生にとっては大学入学は通常では一生一度のごとくであります。本学関係者も、そのことをじゅうぶんに意識して、毎年、新たな気持ちで入学式に臨んでいます。

さて、改めて言うまでもなく、大学は教育と研究の場であります。言いかえれば、研究と教育が分かちがたく結びついているところに大学の本質があります。ここところが、大学が、高校までの教育機関と決定的に異なる点です。ひとことで言えば、大学は学問の場だということです。新入生の皆さんは、まずこのことを、すなわち、自分たちは学問の場に入ってきたのだということを実感していただきたいと思えます。

学問というものが、人類に常に幸福をもたらしてきたと断言することはできません。ときには過ちを犯したことがあったかもしれませんが。しかしながら、人類の歴史のなかで、そもそも学問という概念が成立したときから、人間は学問というものに、文化とか社会とかの発展の夢を託してきたことは間違いありません。そして、事実、幾多の紆余曲折を経ながらも、人類は学問の発展に導かれて、常にその夢のなにかがしかを実現してきたのです。つまり、学問に携わることは、夢を紡ぐことにほかなりません。大学関係者は、教職員も学生も等しく、絶えず夢を紡ぎ続けていることになります。

一方、若い皆さんにとって、大学生活がそれぞれの人生設計のなかで大きな重要性を持っていることは疑いありません。それだからこそ大学に入学してきたのだと言っても過言ではありません。自分の人生を見つめ、そのために努力することは、結局、夢を紡ぐ作業にほかなりません。シェイクスピアの晩年に「我々は夢と同じ素材でできている」という言葉があります。この「我々」を「人生」と置き換えることもできます。大学生活のなかで、人生という夢の基礎をどのように築いてゆくのか、それがこれから問われることになります。蜘蛛が糸を紡ぎながら美しい幾何学模様を織りなしてゆくように、皆さんは夢の糸を紡ぎながら、将来の計画を織りなしてゆくことになります。

その大事な作業をするときに、他人任せにしたり、のんびり遊び半分にしたりすることが、果たしてありうるでしょうか。仮にそういう人がいるとすれば、その人は夢を見る資格のない人です。皆さんのなかにそういう人がいることを、本学は想定しておりません。夢を紡ぐのは必死の作業なのだということを、ここで確認したいと思います。

大学生活の中心をなすものが授業であることは言うまでもありませんが、大学での「学び」は授業だけから得られるものではありません。サークル活動、課外講習、ボランティア活動、など、あらゆる活動が、かけがえのない体験となります。すべてが夢を構成する重要な要素となります。

こんにちの社会情勢にはきわめて厳しいものがあり、大学もそのことに無関心ではできません。経済ばかりでなく、政治や国際情勢にいたるまで、不安な状況が続いています。その中であってなお、夢を見続け、夢の実現に向かって努力するだけの力を皆さんが本学在学中に身につけられることを切に願っています。

皆さんの学生生活の実り豊かならんとことを祈念して、式辞とさせていただきます。

平成22年4月2日